群教セ	G14 - 01
	平 15.213 集

自ら課題を設定しようとする児童を育てる総合的な学習の時間

── 他者との交流を意識した「赤堀町ちょうさたい」を通して ──

特別研修員　　石原　剛

《研究の概要》

本研究は総合的な学習の時間において、自らの課題を進んで設定しようとする児童の育成を目指す実践的な研究である。地域を学習の対象とする中で、その地域で生活する人の生の声を取り入れることにより、児童はまず興味・関心を持つ。そして、児童自らの手によるグループ作りや児童の疑問を生かして計画作りを行うことにより、課題意識を高め、児童の意欲を継続させ、進んで追究するための素地を育てようとしたものである。

【キーワード：教育課程　総合的な学習 - 小　地域学習　課題意識　意欲】

Ⅰ　主題設定の理由

本校は赤堀町の南に立地し、粕川の自然の流れを生かしたせせらぎ公園などの豊かな自然に囲まれている。学校全体の雰囲気も進取の気性に富み、ここ数年「学校の総合化」を経営の柱に据え、総合的な学習の時間にも積極的に取り組んでいる。そしてその積み重ねから、児童は高学年になるに従い、追究する力やまとめ、発表する力をつけてきているように感じられる。

本研究の対象である３年生も、総合的な学習の時間はもちろん未経験であるが、２年生での生活科では、積極的に取り組んでいる様子が見られた。特に２年生の２月に行われた「あそびランド」では、１年生を遊ばせてあげようと、児童が一丸となって課題に取り組む様子が見られた。また、１学期のかすかわタイム「かす川たんけんたい」を見ても、好奇心の旺盛さと、友達同士の協力的な学習態度が発揮されている。また、学習発表の際には、参観に来た保護者を前に、堂々とした態度と満足した表情を見せてくれた。ただ、それは教師主導型の学習において特に顕著であるとも言える。

そこで総合的な学習の時間を通して、自ら課題を設定しようとする児童を育てたいと考えた。児童の課題設定の段階で、地域の人々の声などを取り入れ身の回りの人たちを意識させ、またグループ設定の段階で、支援しながら児童主体の活動を行うことにより、課題解決に対する意欲を向上させ、今後進んで追究することへとつながるだろうと考え、本主題を設定したのである。

Ⅱ　研究のねらい

総合的な学習の時間の単元「赤堀町ちょうさたい」において、①地域の人々のたくさんのインタビュー結果をもとに、赤堀町で１番調べたい事柄をさがす活動（個人課題設定）、②児童自らが友達同士の交流を経てグループを編成する活動（グループ課題設定）、③話し合いによって活動計画を立てる活動（活動計画作成）、これらを通して、自ら課題を設定しようとする児童が育成されることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

１　課題をつかむ段階において、児童個人による地域住民への調査活動「赤堀町のじまん 300」を行うことにより、これまで気付かなかった赤堀町の姿の一端に触れ、知的好奇心を触発され、積極的に調べ活動を進めようとする意識を持つことができるだろう。

２　追究グループを設定する段階において、児童同士で似ている課題を持った友だちを探しグループを主体的に編成する活動を行うことにより、グループとしての課題が明確になるとともに、一人一人の課題への意識が高まるだろう。

３　活動計画を立てる段階において、児童一人一人があらかじめ疑問点やその解決方法を考えておき、それを出し合ったものをＫＪ法を用いてまとめることにより、個人の思いが反映されたグループ全体の計画が作られ、一人一人の課題意識がさらに高まるだろう。

IV　研究の内容

1 基本的な考え方

(1)「自ら課題を設定しようとする児童」とは

自ら課題を設定しようとする児童とは、幅広い学習材の中から①何かおもしろそうな興味深いことを見いだしたり、「どうしてなのだろう」と不思議に感じるような感性を持ち、②その疑問点について「もっと知りたい」、「早く知りたい」と思う児童のこととととらえる。

まず、児童の興味・関心を引くような学習対象を教師が提示することにより、児童の内的動因は高まる。そして、友達同士の交流を行い、学習対象にかかわる情報を共有する場面を設定することにより、児童一人一人の学習材に対する理解は深まり、課題意識がさらに高まると考える。

（2）単元「赤堀町ちょうさたい」とは

単元「赤堀町ちょうさたい」とは、赤堀町に関する様々な事柄の中から児童一人一人が課題を見つけ、地域に関わりながら、その解決に向け主体的に活動していくものである。児童に自らの課題意識をもたせるには、学習対象が児童の興味・関心を引くものである必要がある。興味・関心を高めるためには、できるだけ対象に直接かかわることができたり、身近な人とふれあったりすることも望まれる。そこで、児童にとって身近な存在である赤堀町の史跡や産物、行事など様々な事柄を学習材に選んだ。

また、地域の人たちから地域の情報を得ることにより、「もっと知りたい」という一人一人の課題意識を高めるとともに、人々の地域に対する熱い想いに触れ、町に対する愛情を深めることもできると考える。

(3)「他者との交流を意識」させる手だての工夫

発達段階から考えると、小学３年生の児童が長期にわたって意欲を継続させるには、意図的に意欲を喚起する指導の工夫が必要である。そこで活動の中に計画的に他者を介在させて刺激を与えることにより、意欲の継続が図れると考えた。

まず一人学びではなく、グループ学習という形式をとる。その中で、一人一人の課題を生かしてグループ設定を行う機会を設けることや、グループ課題をもとに児童一人一人に疑問を考えさせてから計画作りを行うことで、各自の課題意識を高められると考えた。

また、特に本校の３年生は、昨年度「１年生を遊ばせてあげよう」という交流の視点を与えたところ、意欲的に取り組んだ経験をもつ。そしてその単元の成功体験から、「人に伝える」

ことの喜びも十分実感している。そのため、「近隣の学校の同じ３年生に教えよう。」と呼びかけ、発表の場の設定とした。

(4) 「赤堀町大好き300」とは

これは、児童一人一人が課題を設定する際の条件である、赤堀町についての知識を広げるための学習活動である。まず、各自が一人３人以上、地域の人にインタビューし、赤堀町の大好きなところを集める。教師は集められたおよそのべ300人の声をＫＪ法により分類し、掲示する。児童はそれを見て、これまで知らなかった赤堀町の姿に触れたり、あらためて身近な町のよさに気づいたりすると考えた。そしてこれらたくさんの要素があれば、児童一人一人が自分の興味・関心を持つ事柄を探し、課題を設定する際の支援となると考えたのである。

(5) 全体構想図

自ら課題を設定しようとする児童を育てる総合的な学習の時間

赤堀町ちょうさたい！

	10、11月（９時間）【つかむ】	11、12、１月（14時間）【追究する】	２、３月（８時間）【まとめる、発表する】
児童の活動	・クイズ「アカボリの泉」を通して、赤堀町のことを知る。 ・地域の人々から赤堀町の大好きなところについて聞き取り調査を行う。「赤堀町大好き300」 ・類似の課題を持った児童同士でグループを作る。	・各グループごとに追究活動を行う。 ・ＧＴを招き、町のくわしい話を聞くとともに、町を愛する人の気持ちに触れる。「地域の人から学ぼう会」 ・追究活動の成果を掲示する。「ひみつの実」 ・中間発表会を行う。	・各グループごとに、まとめの掲示資料や作品などをつくる。 ・グループ内で発表会の練習を行う。 ・近隣の学校の３年生に自分たちの追究を発表するなどの、学習交流会を行う。
主な手だて	【個人課題設定】 【クイズ「アカボリの泉」】 児童に赤堀町の基本的な知識を持たせるため、おもな産物、名所旧跡などを三択クイズで紹介するもの。３年生の児童が楽しく学べるようにクイズと写真、実物等を用いた解説を用意する。 【赤堀町大好き300】 ※上述の通り	【グループ課題設定】 【児童の手によるグループ決め】 児童自らがグループ決めを行う活動。自分と共通する課題を持った友だちを探し、そこで細かい追究内容や方法まで話し合いをした後、グループを組むかどうか自分たちで決める。この活動を通して一人一人の課題意識が一層高まることをねらっている。	【計画作り】 【一人一人の疑問をもとに行うグループの計画作り】 児童一人一人にグループの課題にかかわる疑問点を５つ明らかにさせておく。それをもとにグループの追究計画を立てることにより、一人一人の課題をグループの課題に反映させることをねらっている。
検証方法	・宿題カード　・「赤堀町大好きベスト１」の記述 ・各種ワークシートの記述　・グループ決め話し合い活動の様子		

☆本研究はこの部分を取り上げた実践研究である。

2　実践の概要および結果と考察

考察は、抽出児Ａ子を中心とした児童の活動の観察、そして各種ワークシート、意識調査、めあて・ふり返りカード、計画用紙等に記述された内容をもとに行う。アンケート結果等は、学年全員（81名）を集計したものである。抽出児Ａ子は、素直な性格で学習に真面目に取り組むことができる。友だちにも穏やかな態度で接することができるが、自分から進んで友だちに声をかけたり、グループ学習において中心的な役割を果たすことは少ない。課題設定にあたっては、様々な事柄に興味は示すものの、テーマを絞って深く追究する姿はあまり見られない児童である。

(1) 「赤堀町大好き300」を生かし、積極的に調べ学習をするための意識化ができたか。

（見通し１）

ア　実践の概要

児童の活動内容は、次の通りである。

① 学校で話し方の指導や、友だち同士の反復練習等インタビューの練習を行う。

② 地域の人々３人以上に、テーマ「赤堀町で一番好きなところ、こと」でインタビューする。

③ インタビューで得た情報を付箋紙に書いて、内容別に掲示する。

④ 付箋紙の貼られた掲示板を見て、個人課題を考える。

イ　結果と考察

④の活動において。「みんなの『大好き』を集めたら、こんなにたくさんになったよ。」と上記③の掲示を見せた。５枚の掲示板にすきま無く貼られた付箋紙に児童は驚き、口々に「すごいね」、「100よりたくさんだよ」等の声が聞かれた。そして教師が、「これを見て『へえ』と思ったら、その子に詳しく聞いて来るんだよ。」と児童相互の交流をうながす時間をとったところ、掲示板の前は人だかりとなり、珍しい項目を書いた友だちのところに先を争って行こうとする児童や、興味・関心の広がりから「12人に聞いてみたよ」と満足そうな表情を浮かべている児童の姿が見られた。自分が真剣にインタビューしてきて情報を得たことから、友だちの情報にも価値を見いだし、夢中でとびついていることがわかる。

図１は、自分の選んだ課題と今回の学習との関連を示したグラフである。「自分たちのグループが選んだ課題」について、その存在を以前から知っていた児童は13%であった。49%の児童が、今回の学習を始めてからその事実について知ったという。これは、この「赤堀町大好き300」の活動が、児童に赤堀町の様々な事柄に気づかせたことを意味する。そして、半数近くの児童が、最近知った事柄を自分の課題に選んでいることから、その事実が児童の知的好奇心を刺激したことがわかる。また、「よく知っていた」と答えた13%の中には、自分がインタビューしてきた内容を課題に選んだ児童もいた。例えば「Ｂ家のいちごづくり」を選んだ児童は、「お母さんにインタビューしていちごがいいと思ってたけど、たくさん友達が聞きにきたので自信がついた。絶対いちごにしようと思った。」と書いている。友達との交流は、自分の思いを深めることにも役立っているのがわかる。

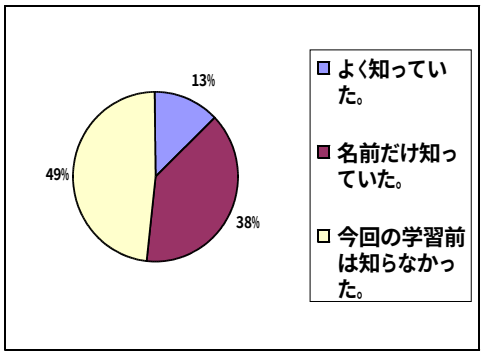
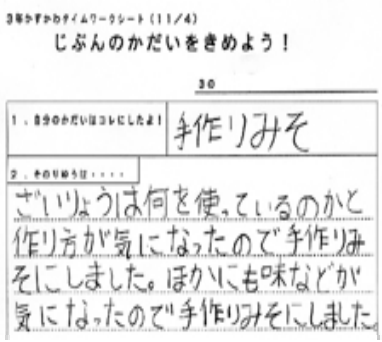


図１　自分の選んだ課題と今回の学習との関連

本学習に入る前にしょうぶ園、ベイシア、南小を課題候補として挙げていたＡ子は、赤堀町の基礎知識を紹介したクイズ「アカボリの泉」や、友だちのインタビューカードによる情報を見ることを通して、牛石へと興味の対象を変えていった。その後、確認のため「赤堀町大好き300」の掲示板を見たところ、ある友達の書いた手作りみそに注目するようになった。そして、この２つの候補を前に、どちらにしたらいいか、なかなか決まらず困っていたようであった。Ａ子については課題意識の深まりを重視したかったので、より人とかかわった題材の方がふさわしいと判断し、「自分の生活

資料１
Ａ子の自分の課題を決めた理由（感想）


じぶんのかだいをきめよう！

30

1．自分のかだいはコレにしたよ！　手作りみそ

2．その理由は・・・・

ざいりょうは何を使っているのかと作り方が気になったので手作りみそにしました。ほかにも味などが気になったので手作りみそにしました。

と関係のありそうなものの方が、やりやすいんじゃないかな。」と助言したところ、「自分の地区はそんなことやっていないのに、どうしてあの地区はみそ作りをしているんだろう。」と思いつき、手作りみそをテーマにしたと言っている。また、ワークシートによると、材料や味も気になったという。確認のために掲示板を見に行った行動や、教師の助言により情報を得たことにより、好奇心が触発され、自ら進んで課題を選択したと言える。

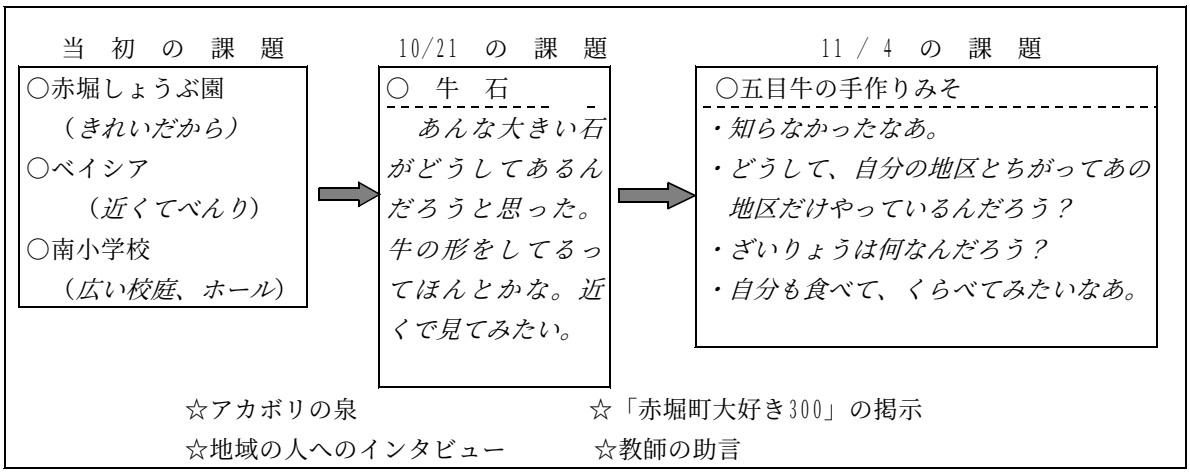


図2　A子の学習テーマの変化

(2) 児童同士の話し合いによる追究グループ編成を実施することにより、自らの課題意識は高まったか。（見通し２）

ア　実践の概要

①　自分の一番やりたい課題を付箋紙に書き、掲示板上の自分と似た課題の近くに貼る。
②　近似の課題を持った児童同士で、追究したい細かな内容や方法について話し合う。
③　話し合いの結果をもとにして､グループを組むかそうでないかを児童が主体的に判断する。
④　グループ結成に至らなかった児童は、別のグループを探し、再び話し合う。

イ　結果と考察

児童は自分の課題を紙に書いたものを持ち、仲間探しを始めたが、あちこちで輪を作り、互いに自分のやりたいことを話し合った。多くのグループは項目の一致を確認した後、内容や方法について話し合い、コンセンサスを作り上げていった。ただ、話し合いの末グループを組むことができなかった児童や、似た項目を探せず困っている児童には直接支援をした。最後まで残っていた２人については、「一番調べたいことを言ってごらん」と聞いたところ、どちらも赤堀町の夏の行事に関連することがわかり、グループを組むことができた。

ここで、「自らの課題」をそのまま、または発展させてグループの課題とした児童は76名中50名（65.8%）いたが、友だちと話し合った末、違うテーマを選んだ児童も26名（34.2%）いた。後者のほとんどは類似のテーマを見つけられなかった児童であるが、資料２の感想のように、友

資料2 友だちの誘いを受けてテーマを選んだ児童の声

○ぼくは、さいしょ「けやきさい」を調べようと思っていました。でも、Ｙちゃんの話を聞いて、「花火大会ってすごくいいんだあ。」と思いました。それでこのテーマにしました。

○ＫくんとＤくんがホウレンソウのことをさそってきたから。ぼくんちはホウレンソウを作ってるから、ホウレンソウのテーマにしようと思いました。いろいろお父さんに聞けると思ったからテーマをホウレンソウにした。

達の課題に魅力を見つけて変更したことがわかる。

手作りみそを自らの課題に決めたＡ子は、２人を「手作りのみそって、どんな味がするのか知りたくない？」と誘い、同様に手作りみそに興味を持っていた１人を含め、グループを組んだ。日頃の様子と比べると、Ａ子が友達を誘うのはまれであることから、積極的な姿であるといえる。友達の情報をもとに設定した自分の課題を、どうしても解決したいという強い意欲の現れと考えられる。

(3) 個人の疑問をもとにＫＪ法を用いて活動計画作りをすることにより、個人の課題はさらに広がり、深まったか。（見通し３）

ア　実践の概要

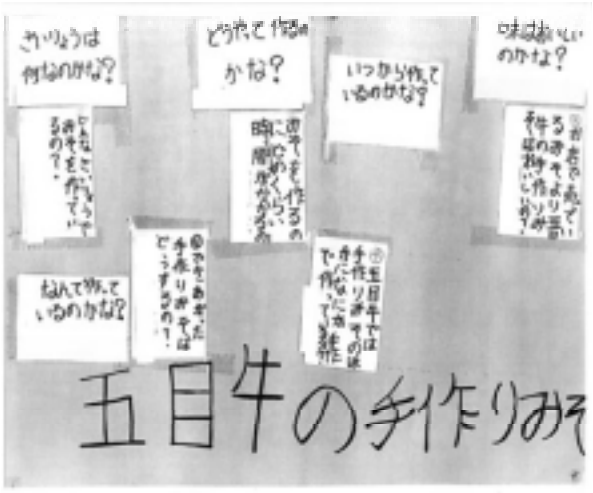
①　自らの課題を設定した児童一人一人は、その課題に関わる疑問点を５つ考え明らかにし、５枚の付箋紙に書く。

②　これをグループ内で分類しつつ話し合いを行うことにより、個人の疑問を生かしながら、グループ全体の課題を設定した。（資料３）

イ　結果と考察

この授業を行う前に、次時の予告を含めて計画作りの話し合い活動について聞いてみたところ、半数以上の児童が不安を抱えていることがわかった。そこで、ワークシートに疑問点５つを書いて、それを台紙に貼っていけば話し合いは容易にできると考え、提案した。そして疑問点については、内容とその解決方法を書かせ、次時に備えさせた。

資料3　A子のグループの意見の分類表



児童は各自疑問点を考えてきて、次時に臨んだ。その時点で授業に対するやる気を尋ねたところ（次ページ資料５・右上のハートマークの数）、やる気を示すハートの数は３点満点で2.77（92.3%）と、かなり高くなっていた。これは、毎回授業後に行う満足度調査と比較しても、９回中２位の高得点であった。授業を始める前からこんな高い期待度を示しているのは、各自が課題についての疑問点を明らかにできたという気持ちが、苦手意識の高い話し合いを上手にできるのではないかという期待感へとつながったことが考えられる。

資料4　授業後の感想

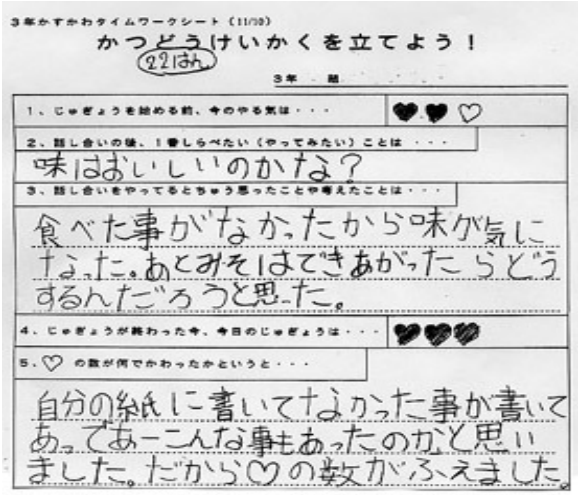
○わたしはたのしくじゅぎょうを始め、終わりもちゃんとできたからです。話し合いをしていたらやる気がでました。
○いろんなことを話して、もっとやるきになれたから。
○もくひょうができて、はりきっているから。
○話し合いがものすごく進んだからハートは４つでもいいと思いました。

実際の話し合いの様子も活発に行われた。「自分と似たような意見が出たら、『自分も！』と言って自分の意見を言うといいよ。」と助言したところ、友達の意見を良く聞くようになり、また一つの意見に対して似たような考えが直ちに出ることから、意見の仲間分けも比較的容易に行われた。授業終了後のアンケートによると、この授業のやる気ハートマークの数は3.00(100%)にさらに増えている。マークを増加させた児童の割合は、全体の35.9%であった。授業前の期待感がさらに充実感に高まったことを示している。（感想は資料４参照）

Ａ子は計画作りの話し合い活動でも、終始落ち着いた態度で、他の友達の意見を聞いてい

た。そんな中、分類を進めているとき、「やっぱり味が気になるよねえ。」というＡ子のつぶやきに、メンバーの一人が「ぼくも食べてみたいよ。」と反応した。それを聞いたＡ子は一瞬ニコッと笑い、 その後嬉しそうな表情で活動を進めていた。自分の思いが他の友達に受け入れられたということが確かめられたと考えられる。また、ワークシート（資料５参照）によると、やる気を増やしたＡ子は、その理由として友だちの考えに触れたことを挙げている。十分な事前の準備を経た話し合い活動により、友達との「学び合い」のよさを感じ取り、本人の追究意欲を増進していったことが考えられる。

資料５　Ａ子の授業前後の やる気自己評価


3年かすかわタイムワークシート（11/30）

かつどうけいかくを立てよう！

22はん

3年　組

1、じゅぎょうを始める前、今のやる気は・・・ ♥♥♡

2、話し合いの後、１番しらべたい（やってみたい）ことは・・・

味はおいしいのかな？

3、話し合いをやってるとちゅう思ったことや考えたことは・・・

食べた事がなかったから味が気になった。あとみそはできあがったらどうするんだろうと思った。

4、じゅぎょうが終わった今、今日のじゅぎょうは・・・ ♥♥♥

5、♡の数が何でかわったかというと・・・

自分の紙に書いてなかった事が書いてあってあーこんな事もあったのかと思いました。だから♡の数がふえました。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

３年生という発達段階を考慮し、個人の課題設定の際に地域の広い分野の人々へのインタビュー活動を行ったことは、それまで知らなかった地域の新しい姿を知り、「知りたい！」という強い課題意識を持つこととなった。また、児童同士の話し合いによる追究グループの選択や、個人の疑問をもとに行う活動計画作りは、グループの課題をより鮮明にするとともに個人の課題意識をさらに強め、課題解決への意欲を高めることにつながった。

2　今後の課題

○「赤堀町大好き300」により、多くの児童の課題意識は高まった。しかし、たくさんの事柄を見ても、さほど興味をもたない児童もいた。あらかじめ児童の興味・関心の傾向をつかんでいれば、当初の段階で意欲の薄い児童に対して、よりよい支援ができたと考える。

○計画作りの前に個人の疑問について考えたことは、見通しを立て、話し合いが意欲的に進むことにつながった。しかし、課題とする対象を設定しても、具体的に疑問点を出すことができない児童もいた。日頃の学習で、学習する対象から疑問点を引き出すような練習をしておくと、より具体的な課題を設定することができると考える。

〈参考文献〉

・新潟県上越市立大手町小学校編　『未来を創る　子どもの学び』　(2002)